



作者さんや読み手さんの声は  
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ



泣きべそをかきながら、マリはひたすら歩きました。ときどきでるしやつくりを無理やり抑えながら、マリはただ、がむしやらに進んでいったのです。気がつくとマリは薄暗い洞窟を進んでいました。

洞窟の一番奥には、黒くて大きな生き物が横たわっていました。トカゲのような、ウサギのような、なんとも不思議な姿をしています。マリはこの生き物にすつかりと引き付けられました。呼吸とともに大きく動く腹を興味深そうに眺めながら、マリは言いました。「わたしはマリっていうんだ。ねえ、あなたのお名前は何？」

黒い生き物はゆつくりと寝返りをうち、マリを深い眼差しで見つめました。

「私に名前などない。」

骨にまで響きわたる、深く暗い声です。

「でも、そうしたら、あなたのことをどう呼んでいいかわからないわ。」

「好きに呼べばいい。『X』とでも呼ぶがいい。」

「えつくす、さん？ねえ、Xさんはここで何をしているの？」

「……………」

「あ、言いたく無いのならいいよ。ただ、こんな暗いどうくつの奥で、何をしているのかな？つて」

Xはマリから視線を離れた。空を見つめ、そして淡々と言った。

「…帰れ。ここには何も無い。私には私の場所が、お前にはお前の場所がある。興味本位で他者に関わるものではない。」

「お母さんから叱られたんだもん。今帰る場所なんてないわ。それに、ここに何も無いなんてことはないよ。だってあなたがいるじゃない。」

「私は何も保持していない。私は名も持たぬのだ。名すら持ち合わせることを許されなかった。ただ、存在するだけ。この空間から動き出すことすら許されていない。」

「どうして？外に出て、好きなところで好きなことができるほうがよっぽど楽しいでしょ？」

「自由とは責任を伴うものだ。自分自身で最善の手を考慮しなければならぬ。束縛がない生活は、それ自体が束縛であるのだ。」

「良く分からないけど、それであなたは閉じこもっているの？」

「閉じこもっているだけではない。歌っているのだ。」  
そういうと、Xは歌い始めました。リズムの無い、抑揚のみの歌。それは何か悲しい歌でした。悲しさの中にも希望が見出さる、そんな歌でした。

「帰れ。私はもうこれ以上お前とは関われない。だが、大人になったとき、お前にも分かる時が来るであろう。自由の重さ。他者との関わりの辛さ。そんなときは、この洞窟で歌うといい。生きていく上で束縛が必ず付きまとうのならば、せめて束縛される内容は自分で選びたい、そんなわずかな自由を求めるのが大人だ。」  
低く響き渡る声は、洞窟の中で幾重にも重なった。

「さつきお前は、母親から怒られたと言っていたな。お前は自分が好きにさせてもらえないと思っっているかもしれない。だが、真に自由であるのは子供時代だけだ。」

—そんなことはない。だって、お母さんは。

「うそよ。私はそんな大人にはならないわ。あなたはただ逃げているだけじゃない。」

「その通りだ。しかし、お前も母親から逃げたただけではないか。この洞窟は何かから逃げたものが迷い込むところだ。」

「なら、私はこんなところには二度と来ない。あなたみたいにはなりたくない。素敵な歌を教えてくれてありがとう。」

マリはそつと立ち上がり、そして洞窟から出ました。さきほどの歌を呟きながら、マリは来た道の逆をたどりました。

「マリ！よかった！お母さん心配させないで！」

コンビニの前で、慌てて自分を探すお母さんと合流。

「ごめんなさい。」

その言葉に、迷いはありませんでした。

サンタさんへ。

**ゲームのソフトをください。**

服をください。

**食べ物をください。**

**パソコンください！**

絵本ちょうだい！

おかあさんとおとうさんをください

**お人形さんをくださいーい。**

水をください。

家をください。

アクセサリーをください☆

**丈夫な身体をください。**

クリスマスの夜、世界中の子供たちが幸せでありますように。



## マスメディア

食品の表示偽装の問題が世間で大きく取り扱われたことは、まだ記憶に新しい。

表示偽装は今に始まったことではない。2003年のイギリスでは、X-men 2 Cereal というスナックが、実際は40パーセント以上の砂糖を含んでいるにもかかわらず、低カロリーであると表示していた事例がある。

今回の偽装問題は、今までずっと続いてきたことがたまたま世間に露見しただけである。昨日も一昨日も、皆の伺い知らぬところで偽装は続けられていただろう。

しかし、この問題はさしたる解決を見せることなく話題から消え去ってしまった。ここには、日本のマスメディアの大きな影響力と、日本人の特性が見え隠れしているようにならない。

日本人は「笑い」を重んじる傾向がある。落語という伝統芸能として笑いを扱っているのも、こんなにも沢山のお笑い芸人がお茶の間を賑やかにしているのも日本だけである。

だが、現代ではこの「笑い」を優先させすぎている。本来は世に起こったことをありのままに国民に知らせるためにあるはずのマスメディアが、視聴者が喜ぶネタだけを探すことに精を出してしまっている。

著名な人間は、このマスメディアの格好の獲物である。最近では、新しく総理大臣に就任した麻生太郎氏の失言に関しての報道がこちらで行われていた。このように欠点のみを大きく取り出して報道していたら、それを見ている国民は、「麻生はだめなやつだ」という印象を植え付けられてしまうだろう。

いくら聞いて面白く話であっても、いつまでも麻生氏の失敗を聞かされていたら飽きてしまう。視聴者を飽きさせないために、マスメディアは常に新しいネタを探していかなければならない。ここにも日本にマスメディアの問題が浮き彫りになっている。すなわち、次々と新たな話題が提供されていくことにより、時間をかけて議論していくべき問題が、埋もれ流されていってしまうのである。

これらの問題は、すべて視聴者が求めたからこそ生まれてしまったものである。よりよい社会を作っていくためには、まず国民が、娯楽と政治、事件の区別を明確に理解すると同時に、マスメディアが利潤のみを求めていく体制を崩すことが必要になる。これがなされなければ、未来の日本社会は立ち行かなくなるだろう。

Xサイト  
クロス  
クロ

眼にうつる人間は、それすなわち殺すことのできる人間だ。帝王政府直属の研究機関によって製造された戦術装鬼、阿久津ケイにとつては――。

王歴元年、世界から戦争が消えた。

帝王政府による独制支配が確立したためである。大戦中は世界的民主国家の樹立を宣言していたにもかかわらず、政府は戦後世界中に厳しい圧政を強いた。もちろん、その卑劣な行いに對しては多くの人間が憤り、無数の反抗勢力が組織された。しかし、帝王政府が製造した異能の使い手『戦術装鬼』によって、それらの組織は次から次に壊滅させられ、現在では冷たく厳しい独裁の冬だけが、世界中に満ちていた。

十十十十

阿久津ケイ――作戦呼称《クロスサイト》は、機械都市ラグナの中枢区画にいた。脱走した試作装鬼を抹殺するためである。

機械都市ラグナは、ほとんどの設備が無人化された極端に人口密度の低い工業都市である。それゆえ特に人払いをしていないにもかかわらず、一般人は誰一人としていない。辺りは静寂で満ち、僅かな足音でさえもが大きく響く。つい荒くなりがちな呼吸を意識して抑えつつ、ケイは改めて自分の置かれた状況を整理しはじめた。

現在、ケイは既に敵の異能によって

攪乱を受けていた。今回脱走した試作装鬼はまだ動作試験も行っていないため、帝王政府でさえまだその能力を把握できていない。だからこそ、どのような相手に対しても高い攻撃力を保てるケイが任務にあてられたのだが、その人選は明らかに失敗であった。ケイの異能は視線を媒介とする。視界中央に浮かぶ青白いX字型のターゲットサイトに、三秒以上標的を捕え

続けることで発動する異能で、およそ七メートルの有効射程を持つ。よって、もし仮にその視界を攪乱する異能を持つ装鬼がいたとしたら、それはケイにとつて最高に相性の悪い相手に違いない。そしてどうやら、今現在ケイが対峙しているのは、まさにそうした装鬼であるらしいのだった。

十十十十

まるでそこに無数の大鏡が設置されているかのように、周辺の光景がちぐはぐに入り乱れている。おそらく、本来は直進すべき光の進路を、各所各所で屈折させているのだ。脱走さえしなければ、きっとこの装鬼は《ミラーハウス》でも呼称されていたに違いない。この屈折がランダムではなく、自在に制御できるなら、ケイが勝てる望みはほとんどない。だがしかし、これほど不利な状況に置かれながら、ケイはまだ勝負を捨てていなかった。

たとえどんな優秀な装鬼であっても、二つ以上の異能を持つものはいない。そしてこの敵の異能は直接攻撃に用いることができない。また、銃器などの装備は帝王政府が厳重に規制しているため、逃亡の身であつては手に入るわけがない。ということは、ケイを倒すためには、敵ははずれ接近して来ざるを得ない。そこをとらえてしまえば、ただトリックシーナだけの異能など、何の障害にもならない。モザイク調に乱交する光景のなか、ケイは静かに敵を探す。

十十十十

先に動いたのは、やはり《ミラーハウス》だった。おそらく、自身の周囲三メートル以内では光を屈折させられないのだろう。ちょうど三メートルの位置から、彼女は唐突に姿を見せた。長めの髪をポニーにまとめ、猫を類想させる大きな瞳を見開いたその容姿は、とても異能者には見えない。しかし、その手に握られた鋭いナイフが、彼女の殺意を雄弁に証明している。

瞬間、ケイは素早く反応していた。

一秒を無限に分割されるような感覚が、彼の身体を包みこむ。完全な反射、続いて回避。ただ視線だけを固定して、ケイはその身を投げ出す。銀色のナイフが宙空を薙ぐ。敵の顔が瞬時にして蒼白に染まる。けれどケイの口元に浮かぶのは、それと対照的な猛禽の微笑。そして三秒が過ぎる。

視界に浮かぶX字型のターゲットサイトに赤変。物理法則が揺らぎ、重力場が発狂する。眼球に秘められていた異能が視線を走り、対象を押しつぶそうと牙をむく。絶対不可避の完全必殺。その圧倒的な威力に、敵はなすすべもなく死を迎えた――

かにみえた。

「さんねーん」

声は、すぐ背後から聞こえた。首筋には、刃物独特の乾いた冷たさ。

「視界を攪乱しただけなのに、全く仕掛けてこなくなつたから、たぶん視線を媒介にする異能なんだからってことは推測できた。有効射程があることも。だって、それで私が接近するまで異能を使わずにいたんでしょ」

「視線を、迂回させたわけか」

「そのとおり。念のため百メートルくらい遠回りさせてある」

「はやく殺せ」

「うーん、そこさ、そこなだけどね」

つい先ほどまで戦闘を繰り広げていたとは思えない緩さで、彼女は続ける。「お友達になりませんかあ？」

「なに馬鹿を言つ――」

「気づいてない？ 私と君の異能は、最高に相性がいいんだよ。だからさ」彼女の吐息が、優しく耳をくすぐる。「私と、世界を変えてみない？」

十十十十

《つがいの死神》の二つ名と共に恐れられ、幾人もの装鬼を巻き込んだすえ、ついには帝王政府に唯一比肩する組織をつくりあげることになる少年と少女の、これは出会いの話である。

## メリー 殺します

ある大学で文系の授業で生徒があるお題に基づいた文章を書き、みんなでその中から選ばれたものを読む、というものがあつた。

あるときからその授業にジンクスがうまれた。それは選ばれた作品の中で表紙作品になったものが現実になる恐ろしいジンクスだつた。

最初は、表紙作品が、DFOが現れるという内容で、その日先生がDFO ラーメンを一位作品の賞品としてたまたま持って来たのが始まりだつた。はじめはこれがジンクスだと気づく人はいなかったが、そこからジンクスは暴走を始めた。

忙しい毎日から解放されたいというしみじみとした内容の詩が表紙に載つた次の日、その作者の授業が全部休講になったり、周りの複数の女性に恋をして悩む主人公を描いた小説の作者が、その日の授業の班替えで周りが全員女子になったり、次々とジンクスが妙なかたちで現れた。

先生はたちまちこれに気づき、なるべく危害がないような作品を表紙作品に選ぶようにした。そしてクリスマス前の週の授業で、「メリー 殺します」というタイトルで、部屋に最初に入った生徒が突然倒れ、死ぬ場面を描いた作品が含まれていた。もちろん災いが起こらぬよう、それは表紙作品にはされていなかった。しかし、生徒の一人でプリントを床に落とすとしてしまい、拾い集めたときにその作品を一番上に乗せてしまった人がいた。その日の授業でその生徒の作品は見事一位を獲得し、賞品にはチューインガムが与えられた。授業のあとは昼休みだったが、その生徒は小テストに備えようと、一番乗りで次の授業の教室に入った。そこでその生徒は賞品のチューインガムを噛みながらテスト勉強をしていたら突然ガムを喉に詰まらせ、倒れて死んでしまった。

*Remembering Christmas*

「よくくりすますがことしもやあてきたあ・・・♪」

ああもうそんな季節か。テレビを見ながらふと思つた。あつという間に今年一年が過ぎ去ってしまったように感じる。

これで一緒に過ごすのは二回目。今年はどうなクリスマスになるのだろう。プレゼント、何もらえるかな。期待したいようなしたくないような。何あげようかな。何したら喜んでくれるかしら。今までは気にしていなかったことを気にしてしまう。今年のクリスマスは私にとって「特別」だった。

一年前のクリスマスも私たちは一緒に過ごしていた。傍から見れば付き合つてもいたし、ごく普通のカップル。でも実際は私の片想いだった。片思い故に、別れが怖くて、それまで何もすることができなかった。それを見かねた友達に背中を押され、その日、私はいろいろな初めてに挑戦した。普段かけているめがねではなくコンタクト、今までしたことのない化粧、着る勇気がなかった女の子っぽいワンピース。サプライズのプレゼントを持って、デートに行った。

「何か今日違うね。」

会った瞬間、目をぱちくりさせながら嬉しそうに言ってくれた。今まで見たことのない笑顔に心の中でガッツポーズ。

この日から、私の中で何かが変わつた。

彼の笑顔が見たくて、それから、いろいろなことをしてみた。彼の喜ぶ顔を見るたびに、私も笑顔になった。それまで多か

つた喧嘩もへり、とても仲が良くなった。そして何よりも、彼の気持ち少しづつ変わっていった。二年かけて、やっと、だ。

今年のクリスマス記念日にしようかな・・・。去年のことを思い出していたらそんな考えが浮かんだ。今までは、どうでもいいと思つていた。どうせ、覚えているのは自分だけだし、どうせ好きなのも自分だけというひねくれた考え方がなくなっている。この一年での大きな変化を祝いたくなつた。

そしてクリスマス当日。きっかけになつた去年同様、目一杯おしやれして、るんるんしながら待ち合わせに向かう。

「メリークリスマス。」

声とともに笑う彼。私はこの笑顔が本当に好きになつた。歩き出しながら、話してみる。

「考えたことがあるんだけどね。今日、うちの記念日にするから。」

意味がわからない、という顔で私を見てくる。考えていたことを、全部話した。どきどきしながら彼の顔を見してみる。

あ、笑つてる。

笑顔を見たら、今まで言うことができなかったことを、むしろように伝えたいと思つた。好きで好きで、でも怖くていえなかつたこと。どうしても今、伝えたい。

彼のほうに近づき、声をかける。

返ってきたのはやつぱり笑顔だった。

私が一番ほしかったプレゼントと共に。

「俺も、愛してる。」

## 川岡宏探検隊　　（伝説の不死鳥を求めて）

ふえにつくす

エジプト神話にその名が登場する不死鳥、フェニックス。その生血を飲めば不老不死になれるという……我々取材班はある筋からの情報をもとにエジプトの奥地に向かったのである。

カイロを出発すること二週間、我々取材班はエジプトの奥地に広がるジャングルの入り口へと到着した。ここから先は現地の人間ですらも立ち入ることのない未開の地である。

「準備はいいかあー！」

隊長の号令の下、Tシャツ一枚に短パンという重装備で慎重にジャングルに足を踏み入れた。日はまだ高いというのにジャングルは不気味に静まり返っている。まるで、愚かな侵入者を品定めしているかのようだった。

「痛っ！ 痛い！」

棒読みの悲鳴に振り返ると隊員の一人が蛇に足を噛まれていた！ 隊長はなぜか既に死んでいる蛇を素手で撃退すると、隊員に血清を打った。針がついていないのに、どうやって打ったのかは謎である。敵意をむき出しにしたジャングルに、隊員達の表情も険しくなる。

「見る。水だ。」

我々の前には地図にはない川が流れていた。そもそも、どうして地図があるのだろうか？ そんな疑問をよそに、隊長はなんのためらいもなく川に入ってしまった。

「う、うわ！ しまった！」

なんと隊長がピラニアに襲われている！ 微動だにしないピラニアに襲われている！ 我々は必死でピラニアと戦った。ピラニアに対して素手で戦ったが、隊員達に全く怪我は無かった。隊長も、ピラニアの歯形すら残っていないかった。我々は対岸から撮っていたカメラマンと合流して先を急いだ。

とうとう未発見の洞窟が見えてきた。この洞窟を抜ければ、いよいよフェニックスと対面である。我々はカメラマンと照明さんを先頭に洞窟へと入っていった。照明さんのライトは必要以上に明るい。松明の必要性がわからなかった。洞窟内を進むこと一時間、急に岩が崩れてきた！ 軽い音をたてて崩れる岩を必死にしのいだ。洞窟までもが我々を拒んでいるというのか。挫けそうになりながらも勇気を振り絞って洞窟を進んだ。

「おいっ！ 見ろ！」

洞窟を抜けた我々は、ついにフェニックスの姿を捉えた！ 切り立った崖の上にたたずむその姿は、まるでペンキを塗ったクジャクのようなであった。フェニックスは我々の姿を認めると、『イヤーン、イヤーン』と一声鳴いて飛び立って行ってしまった。崖の下へ。

今回の探検では惜しくもフェニックスを捕まえることは出来なかった。しかし、その美しくも雄大な姿は我々の眼にしっかりと焼きついている。なにより、カメラに撮れている。我々はへりと呼んでその場を後にした。

川岡宏探検隊の挑戦は、まだまだ続く……。



03

サンタさんへ。

わあ、いいなあ。聖夜に夜空へ昇るたくさんの願いごと。

「Xをください」の、その「X」だけが変わることで、ひとつひとつの願いにこめられた切実さが全然変わってしまう、という不思議。世界の多様性を、フォントの違いによって見せていただいて秀逸でした。

あなたは、どのひとことが心に沁みましたか？  
特別賞：表紙にしま賞 by W班（ のおかげです） / コラム平和賞 by クリスマスツリー班(切実な願いですね。)  
イチオシフレーズ：「おかあさんとおとうさんをください」× 2

7 pt | 4 位 | 1 sp

04

ある家族の二日間。

なるほどだから二日間なんだ、とタイトルの意味をラストでナットク。

バツが、ラストでエックスに変身する小ワザが、すんと効いてますね。

全体のほのぼのストーリーもここちよいのですけれど、ちょっと客観視線で描きすぎてるかな、という印象です。もっと少年のせつなさに寄り添うと、読者の気持ちもより引きつけられそう。

特別賞：ませた賞年 by EVE班(少年ませすぎ！)

1 pt | 7 位 | 1 sp

05

マスメディア

		<p>出ました正統派。 X-menから広げて、笑い、マスメディア、国民の姿勢とうまくつないで着地。しっかり構築されていました。</p> <p>論点の何よりの良さは、マスメディアが悪いんだ、という超アリガチの論調に流されずに、視聴者 = 国民のサガだ、としっかりくさびを打ち込んだところ。</p> <p>特別賞：麻生（あしよ） by 風車班(委員長が麻生好き)</p>			
06	クロスサイト	<table border="1" data-bbox="1149 869 1611 935"> <tr> <td>14 pt</td> <td>2 位</td> <td>1 sp</td> </tr> </table> <p>異能の視覚的な見せ方が、あざやか。戦うことしか知らない装鬼って、どこかスカイ・クロラ風？ そう生まれついてしまった彼らの哀しみまで描出できると良かったのではないのでしょうか。</p> <p>なんだか、文章はとてもじょうずなのに、その器用さがかえって「伝える力」を減衰させてしまっているように見えるのです、この作者さん。</p> <p>好きなことを好きなだけ書いてのシルバー・メダル獲得のあとは、ぜひ、シンプル一段組路線ヘトライを。</p> <p>特別賞：リンチされて終わりで賞 by Quick fix班 (主人公の異能が弱くね?)</p>	14 pt	2 位	1 sp
14 pt	2 位	1 sp			
		<table border="1" data-bbox="1149 2077 1611 2143"> <tr> <td>0 pt</td> <td>8 位</td> <td>3 sp</td> </tr> </table>	0 pt	8 位	3 sp
0 pt	8 位	3 sp			

07

メリー 殺します

こらあ、\*いふぁー  
( なざし)。ガクヤオ  
チ禁止令グレーゾーンだ  
ぞー。

その点を除けば、「ジ  
ンクス」という縛りから  
発生した、いろんな仕掛  
けがなかなか楽しめま  
した。

けど、ガムで窒息する  
のは、うーん、もっと  
はっぴいなオチ希望！  
得点はもらえなかったけ  
れど、いろんな話題を撒  
いて、最多特別賞でし  
た！

特別賞：今日の賞品は  
チューインガムで賞 by  
Rabbit+Ligard=?班 / k  
大ってどこで賞 by Tk大  
班 / その手には乗らな  
いで賞 by X班

イチオシフレーズ：「周  
りの複数の女性に恋をし  
て悩む主人公」

3 pt | 6 位 | 0 sp

08

Anniversary X'mas

恋は突然に落ちるもの  
だけれど、愛はゆっくり  
育ててゆくもの。

そのゆっくりさが、ク  
リスマスという「節目」  
を置くことで、うまくス  
トーリーになっています。  
しあわせ気分満開の  
アニバーサリーでした。  
イチオシフレーズ：「く  
ーりすますがことしも  
やあてきたあ... 」 「俺  
も、愛してる」

11 pt | 3 位 | 0 sp

09

川岡宏探検隊 ~ 伝説の不死鳥を求  
めて~

やったね、今年のオオ  
トリだ!! < 鳥専門店  
さん

TVのわざとらしさが、  
飄々とした語り口にうま  
くなじんで、あちこちで  
笑い炸裂。おつかれさ  
ま。ブロンズメダル&イ  
チオシフレーズ大賞で  
す。

来年は丑年だから

ねっ。  
イチオシフレーズ：「イ  
ヤーン、イヤーン」×3  
「見る。水だ。～ため  
らいもなく川に入って  
いった。」